

# 旅先で聞いた中国の話

高原 明生

あつという間に歳末が近づき、一年を振り返る頃となった。今回は、今年訪ねた国々で見聞きした中国についてのあれこれを点描してみよう。

今年一月にハバロフスク、八月にはサンクトペテルブルクへと、二回ロシアを訪ねる機会があった。中国東北地方の人口は約一億人。それに対し、一九八〇年代に八百万人いた極東ロシアの人口は現在約六百万人。凍てついたアムール川を前にして、かつては押し寄せる中国人に恐れをなしたハバロフスクの人々。だが今は状況が180度転換した。ハバロフスクの住宅費は上がったが、給料は中国の方が高い。中国からの移民は減り、その圧力は感じられなくなった。今は、もっと中国から投資して欲しい。だが中国人は、南方のハ

イテクで栄えている都市を向いていると嘆く。

米国との対抗という太い軸で連携する中ロだが、相互の競争や警戒の要素は残っている。サンクトペテルブルクは中国人の団体旅行者客で溢れていた。だがそこで教えられたのは、ロシアが一路一路に、ロシアの推進するユーラシア経済連合と一路の連結には合意している。そしてプーチンは二度の一路一路サミットフォーラムに出席した。だが、習近平の呼び掛けにもかかわらず、一路一路に参加するとは言っていない。サンクトペテルブルク大学に孔子学院はあるが、中国から来ている教員は共同主任一名だけ。人が来ると厄介だ、入管や「KGB」とトラブルになりやすいという。

米国防総省で九〇代まで現役として勤め、「伝説の老軍師」、あるいはスター・ウォーズに出てくるヨーダに喩えられたアンドリュー・マーシャル氏。米国を訪れたのは、マーシャル氏が春に九七歳で亡くなる直前のこと。この大戦略家が、中国を理解する上で最も有用だとした本があると聞かされた。それは、英訳では *The Propensity of Things: Toward a History of Efficacy in China* と云う、フランスの哲学者フランソワ・ジュリアンの著書だという。幸い、中島隆博氏による邦訳が『勢効力の歴史』として知泉書館より二〇〇四年に出版されている。ヨーダ、恐るべし。日本の軍略家で、他国についてここまで深く探求した者がいたとはついぞ知らない。日本人であれば、「敵中潜行」する現場主義を優先するのだろうか。

初秋の頃、三十数年ぶりに訪れたパキスタン。中国との「全天候型関係」を誇り、中国パキスタン経済回廊(CPEC)の建設を進める。代表的な親中の国であり、インドとの厳しい対立状況にある国だ。そこで、自由で開かれたインド太平洋構想について話したところ、なぜインドの名前をつけるのだとえらい剣幕で叱られた。次に向かった国はスリランカ。だが直行便がない。仕方がな

いので、ドバイを経由した。イスラマバードからのフライトは中国が開発を進めるグワダル港の真上を飛んだ。目を凝らして見下ろしたが、船影は一つも認められなかった。

スリランカでは、中国の会社がハンバントゥータ港の経営権を九九年間得たことがよく知られている。そこを五年前に訪ねた時は、過大に見えるインフラ建設の規模に不安を覚えた。だが、会ったスリランカ人は誰も債務返済について心配していなかった。その状況は今も変化なし。九九年の経営権がどうした、それよりプロジェクトに投資してくれることが重要だ、というのが多くの人の思いのようだ。コロンボ港の埋め立て開発事業は勢いよく進められていた。その後、親中と言われる新大統領が当選したが、別に前の人が親中ではなかったわけではなからう。ただ、依存度の高まる中国についてもっと知らねばならないという真剣な眼差しにも出会った。

中国人は地球の隅々にまで進出して世界の景観を変えている。それに追いつくように、日本の中国研究はもっと世界に貢献しなければ。

東京大学公共政策大学院院長